

「男女不平等主義」

菊池涼太

あらすじ

フリーランスでフィットネストレーナーをしている若松良樹(28)は、同じくフリーランスで美容師をしている佐竹杏奈(30)と、同棲している。とある朝、何気ない事から喧嘩に。そのまま来月の家賃更新の話になり、更新するのかしないのか、別れ話にまで発展し、杏奈は早めに仕事に行ってしまう。職場でいつも通りじゃない二人、その日の夜は、お互い疲れて寝てしまった。

次の日の朝、改めて話し合う事に。良樹は『その場がつまらない、イコール男のせいみたいになるんだ』と、さらには屁理屈を重ね『男女平等って、こっちからしたら全然平等じゃない！』と発言。それに対し杏奈は、洗濯物のTシャツに、首の方からハンガーを押し込んで反撃、口でも正論で論破。そのまま半身浴へと向かう。その間、更新のハガキを見た良樹は、出てきた杏奈にどうするのか尋ねる。『それではここで問題です』と現代文みたい

なテストで、はぐらかしにかかる杏奈。更新したいという事になり、一安心した良樹だったが、次には『キャバクラで働く』と言われてしまう。理屈を並べて、どうにかキャバクラで働かない様にもっていかうとするが、仕事にまで口を出してしまい、またしても杏奈を怒らせてしまう。そしてなぜか、良樹は筋トレを始める。理由は心を鍛えていたから。イケメンタルでキャバクラ勤務を阻止。一緒にSNSを更新して、仕事に繋げようと決めた事で、同棲解消も阻止。

なんとか仲直りした二人は、一緒にお酒を飲みながらイチヤイチャしている。1年後、色々考えた良樹は、男女は不平等だと思っていた方が、相手の気持ちに触れやすいのではないかと着地した。SNSの効果は、それなりにあった。それは仕事だけではなく、二人の関係が深まる事にも繋がった。

【登場人物表】

若松良樹(28)フィットネストレーナー

佐竹杏奈(30)美容師、良樹の彼女

鈴木(25)杏奈の後輩

持田(23)良樹の後輩

客 1 ～ 3

住人 1

○良樹と杏奈の家・リビング（朝）

若松良樹（28）、コーヒーを飲んでいる。

キッチンから、トーストを持ってくる

佐竹杏奈（30）。

杏奈「はい、できたよ」

良樹「うい」

杏奈、良樹をじっと見つめる。

良樹「……」

杏奈「それだけ？」

良樹「……ありがと」

杏奈「私のコーヒーは？」

良樹「カフェインレスにしたって」

杏奈「うんそうだよ、そのカフェインレスコ

ーヒーは？」

良樹「えーっと」

杏奈「いい、自分で淹れる」

と、キッチンに戻っていく。

良樹、パンを食べる。

杏奈、雑にコップ等を用意している。

テレビを点ける良樹。

杏奈の声「今日何時から？」

良樹「午後からー」

杏奈の声「じゃお風呂洗つといてー」

良樹「はーい」

杏奈の声「ついでにトイレ掃除も」

良樹「こないだやったじゃん」

杏奈の声「でも汚れてたから」

良樹「……」

杏奈、コーヒーを持ってくる。

良樹「俺ちゃんと座りションしてるよ」

杏奈「分かってるよ」

良樹「何で汚れんだ」

杏奈「人が住んでるんだから汚れるよそりや」

良樹「ふーん」

杏奈「気付いた時に気付いた人がやれば良いんじゃない？」

良樹「気付いた人」

杏奈「……ん？」

良樹「気付いた人、です」

と、杏奈を手で指す。

杏奈「……なるほどね、はいはい分かりました」

良樹「やるよ、やるけどね」

杏奈「……」

良樹「今日何時から？」

杏奈「午後から」

良樹「え？」

杏奈「朝のお客さんキャンセル入った」

良樹「だったら」

杏奈「（割って）さつき連絡きたから今日この雨じゃしょうがないよね雨の日に美容室って行きたくないよね」

少しの間。

洗濯機の終了音がする。

良樹「洗濯機回したの？」

杏奈「うん溜まってたから、悪い？」

良樹「……なんでイライラしてんの？」

杏奈「来月家賃更新だよ？」

良樹「うん、だから？」

杏奈「更新するの？」

良樹「どういう意味？」

杏奈「……ここに住み始めてもうすぐ二年が経つって事だよね？」

良樹「うん」

杏奈「あ、ちなみに洗濯物ほとんど良樹のだからね、トレーニングウェアとかもろもろ」

良樹「うんうん」

杏奈「トイレは床とか壁じゃなくて、そこも埃すごいんだけど、便器の中のこびりつきを掃除して欲しくて」

良樹「……」

杏奈「家賃更新はさ、してすぐ引っ越すのもつたいない感じするし」

良樹「それって……要はさ」

杏奈「別れたい！」

良樹「……」

杏奈「訳じゃないの！」

良樹「……え？」

杏奈「別れたいけど別れたくない！別れたいとすら思っていない！いや思ってるの！」

良樹「ちょちょ待って、今？そういう話？待って待って、整理させて」

杏奈「うん」

良樹「えーっと、別れたい訳ではない？」

杏奈「訳じゃない訳くない？」

良樹「え、え、どういう訳」

杏奈「そういう訳」

良樹「座ろう、一旦座ろう」

杏奈「座ってるよ」

良樹「ああそうだ」

と、立ち上がる。

杏奈「何で立つの？」

良樹「洗濯物干さないと……じゃない！分かってる、今は違うね、そう」

杏奈「座ろう、一旦」

良樹「はい」

少しの間。

良樹、テレビを消す。

杏奈「何で消すの？」

良樹「消すでしょ？」

杏奈「……そうだね」

良樹「……」

良樹、テレビを点ける。

杏奈「は？」

良樹「悪い所あったら直します、別れたくないです」

杏奈「はい」

良樹「はい」

杏奈「はい、それで？」

良樹「どこを直したらいいですか？」

杏奈「はっきりとコレって言うのがない」

良樹「それって生理的に無理なやつじゃん」

杏奈「……理屈っぽいつて程でもないんだけど、ちよいちよい出てきてるっていうか、なんかその、いつそ振り切って欲しいというか」

良樹「日本語むずい」

杏奈「自分が理屈っぽいのを分かったうえで、それを見せないようにしてる感じなの」

良樹「良い事じゃねそれ」

杏奈「たまに垣間見えるのが、……なんかス

べってるの」

良樹「……え？」

杏奈「人に何型？って聞いた時に『A型です、でも周りにはよくO型って言われますねー、適当なんで』って言うあたりがもうA型なの！」

良樹「ん？」

杏奈「いっそ『A型です、神経質です』って言われた方がいいの」

良樹「はい、うん、なるほど」

杏奈「さっきのあれ、私に対して、気付いた人って言ったのは、冗談交じりというか、ツッコんで欲しかったんだろうなーって思うけど、それも、本音に冗談を上乘せした本音にしか聞こえなくなってきた、だからね」

良樹「はい」

杏奈「ここ最近ずっと、……スベってるの」

良樹「……待って、地味にシヨックかも」

杏奈、パンを食べる。

杏奈「冷たい」

良樹「温めるよ」

杏奈「いいよ、自分でやる」

良樹「違う、何かしてたい、やらせて」

杏奈「うん」

良樹、パンを持ってキッチンへ。

杏奈、コーヒーを一口。

良樹の声「え、俺、そんなスベってる？」

杏奈、コーヒーをもう一口。

良樹の声「あーあ、しゃーない」

杏奈「……」

良樹の声「ショック！にしてもショック！」

杏奈、テレビの音量を少し上げる。

良樹、パンを持ってくる。

良樹「はい」

杏奈「ありがとう」

杏奈、パンを食べる。

杏奈「あれ、なんか違う」

良樹「ん？」

杏奈「もしかしてだけどさ」

良樹「おう」

杏奈「これ電子レンジで温めた？」

良樹「うん」

杏奈「トースターじゃなくて？」

良樹「温めるのはレンジでしょ？」

杏奈「パンなんだからもう一回トースターで

良いでしょ？」

良樹「言われてみれば」

杏奈「そういうところ」

良樹「ごめん」

杏奈「違う！」

良樹「え？」

杏奈、テレビを消す。

杏奈「好きなの！そういうところ！」

良樹「は？」

杏奈「今は神経質なA型なの」

良樹「……シャワー浴びてくる」

杏奈「あ、はい」

良樹「ついでにお風呂洗ってくる」

杏奈「お願いします」

お風呂に向かう良樹。

お風呂のドアが閉まる音。

杏奈「ふー」

杏奈、スマホをいじる。

が、すぐに止める。

杏奈「あ、洗濯物」

と、脱衣所に向かう杏奈。

洗濯物を持って戻ってくる。

杏奈「なんで鼻歌歌ってんだよ」

洗濯物には、スポーツウェアやアンダ

ーウェアだらけ。

杏奈、洗濯物を干さずに、食器をキッ

チンに持っていき、洗い物をしている。

○同・脱衣所（朝）

良樹、身体を拭きながら、

良樹「落ちつけ俺、落ちつけ俺」

○同・キッチン（朝）

洗い物が済んでいる。

○同・リビング（朝）

干してない洗濯物が床に。

杏奈、座っている。

良樹、やってくる。

良樹「仕事もあるし、夜話そう」

杏奈「そうだね」

良樹、洗濯物が目に入る。

良樹「……」

杏奈「……」

良樹、洗濯物を干し始める。

良樹「トレーニングを教えるのもするのも仕事だし、しょうがないじゃん」

杏奈「にしても多くない？」

良樹「お客さんに臭いって思われたら印象良くないし」

杏奈「そうだね、私もシャワー浴びよっかない」

良樹「そうすれば」

杏奈「お風呂洗った？」

良樹「……洗ってない」

杏奈「は？」

良樹「だから洗ってない」

杏奈「え、何で？」

良樹「いや、別に」

杏奈「別にじゃなくて、え、私食器洗ったんだけど」

良樹「うん」

杏奈「だからうんじゃなくて」

良樹、Tシャツを強めにパンパンする。

杏奈「……え、何？」

良樹「だからだろ？」

杏奈「え？」

良樹「あなたが、食器を洗ったからでしょ？
シャワーの水圧が下がったからね」

杏奈「そんぐらい」

良樹「洗えない訳じゃないけどね！時間かかるから！後にしました」

杏奈「そんな怒る事じゃない？」

良樹「我慢してたじゃん？水圧下がった事言わなかったし、洗濯物そのまんまにしてある

事も言わなかったし」

杏奈「すみませんね、気つかえなくて」

良樹「こちらこそ、一生懸命働いて汗流した洗濯物が多くてごめんなさいね」

杏奈「あーもう、仕事行ってくる」

杏奈、上着を取って出ていく。

良樹、洗濯物を干している。

○美容室

杏奈、シャンプー台に横になり、自分で自分をシャンプーしている。

鈴木(25)、やってくる。

鈴木「……私、流しましょうか？」

杏奈「あ、おはよう」

鈴木「おはようございます」

杏奈「大丈夫、お客さんの気持ちになっただけだから」

鈴木「にしては激しくシャンプーしてますけど？」

杏奈「強くやって欲しい時もあるよねー」

鈴木「そうですね、個室なんで、ごゆっくり」

鈴木、出ていく。

杏奈「やだ、背中に」

○フィットネスクラブ

良樹、トレーニングをしている。

良樹「おりゃ」

良樹、重さを上げる。

良樹「うおりゃやや！」

やり終えて鏡をみる。

持田(23)、やってきて、

持田「先輩、声でかいですよ」

壁に『過度な声出し禁止』のポスター。

良樹「出ちやう時もあるよね」

持田「そうですけど」

良樹「ごめん、気を付ける」

持田「いえ、今日の締めはベンチですか？」

良樹「まったく、持田、最後のトレーニングが

何か知ってるか？」

持田「……ストレッチですか？」

良樹「ちげーよ」

良樹、プロテインに水を入れ、

良樹「これだよ」

と、前腕と上腕を使いながら、プロテインをシェイクする。

持田「お、お疲れ様です」

去っていく、持田。

良樹、鏡を見ながらプロテインを飲み

干す。

○良樹と杏奈の家・リビング(朝)

杏奈、ソファで寝ている。

良樹、コーヒーを飲んでいる。

杏奈の席にもコーヒーが置いてある。

目を覚ます杏奈。

良樹「おはよう」

杏奈「おはよう」

良樹「昨日ごめん、疲れて寝ちゃった」

杏奈「ううん、私も眠かったから」

杏奈、起き上がり洗面台に向かう。

良樹、窓の外を見つめる。

良樹「今日も雨か」

杏奈、戻ってくる。

杏奈「あ、コーヒーありがと」

良樹「パンは無いけど」

杏奈「ううん、今日は何時から？」

良樹「今日も午後からだね、そっちは？」

杏奈「休みだよ」

良樹「火曜日かそういえば」

杏奈「いや、フリーランスだから関係ないよ」

良樹「あーそうだったか」

杏奈「むしろ休みのお店多いから、そこで集

客できれば、単純にキャンセル入った」

良樹「雨だとそんなに嫌なんだね」

杏奈「トリートメントした後は、気持ち的に

ね、あんま影響ないけど」

良樹「テレビ点ける？」

杏奈「いい」

良樹「……俺、スベってる？」

杏奈「たまにね」

良樹「昨日考えたんだけど」

杏奈「うん」

良樹「例えばキャバクラってさ、男が女性と楽しくお酒を飲む為に行くわけじゃん？」

杏奈「うん」

良樹「女性が接客して、男性を楽しませる仕事な訳じゃん」

杏奈「行ったことないけど、そうだね」

良樹「でもさ、俺も数える程度しか行ったことないけど、なんかさ、こっちが楽しませなきゃ、みたいな空気になるんだよね」

杏奈「はあ」

良樹「その場がつまらない、イコール男のせいみたいになるんだ」

杏奈「そうかな」

良樹「っていう結論に達した」

杏奈「どういう結論？」

良樹「だからスベってるんじゃないくて、スベってるかもだけど、そこを笑いに換えられればより良いよねって」

杏奈「笑いに変えるって、私芸人じゃないし」

良樹「俺も芸人じゃないのにスベってるって」

杏奈「それは例えで」

良樹「その例えがお笑いだったから、お笑いの例えで返しただけで」

杏奈「あーもう、今のキャバクラの例えとい
いわかりづらい」

良樹「血液型の例えもわかりづらい」

杏奈、コーヒーを一口。

杏奈「前にさ、良樹がさ、元カノの話した時
あったじゃん？デートの時に全然お金払わな
いタイプだったみたいな、学生の時の元カノ
ね、友香って言ってたかな」

良樹「うん」

杏奈「しかも結構細かく金額まで覚えてて、
そういう昔の事覚えてるんだーって思った」

良樹「それ今関係ある？」

杏奈「関係ある」

良樹「関係ないでしょ」

杏奈「テーマパークでご飯食べるなら、帰り

に食べようだの」

良樹「払うのこっちだし、つか学生の時の話ね、金ない時ね」

杏奈「まあね」

良樹「そしてまずその話が昔の話だよね？」

杏奈「え？」

良樹「一緒に住むより前だよね？それ話したの」

杏奈「……」

良樹「って事は二年前の話だ、元カノの名前もテーマパークの事も全部覚えてる、細かいのそっちじゃない？」

杏奈「細かいとは言っていない」

良樹「要はそういう事でしょ？男のくせにみ
たいな？」

杏奈「あーあ、そういう事そういう事、器が
小さい、女が楽しませろとかダサすぎ」

良樹「この際言わせてもらうけど、これは世
間に対してもだけど」

杏奈「どうぞ」

良樹「男女平等っていうのはどう思いますか？」

杏奈「言葉の通りでしょ？」

良樹「ですよ？収入だの昇進だので男女差別をなくそうと、ただそれ以外にもありますよね？」

杏奈「うん、何よ」

良樹「重たい荷物は男が持って当然みたいな」

杏奈「私は自分で持つ」

良樹「そうなんだよ、持つ人も居るんだよ、そして近くで持っていない俺を見てる人も居るんだよ、持つよ持つけどね」

杏奈「……」

良樹「男は大和撫子が好きなんだよ、重たそうにしてるから手伝ってあげようと思う訳、それを当たり前前の様な感じの、態度だところちだって腹立つ訳、分かりますか？」

杏奈「それは人によるじゃん」

良樹「そうね、そうだよ、でもまだあるよ」

杏奈「うん」

良樹「温泉の男子更衣室を掃除してるのはお
ばちゃん、つまり女性ですよね？」

杏奈「知らないけど」

良樹「男子の身体を平然と触ってくるおばち
ゃん居ますよね？」

杏奈「え？着替えてる時に？」

良樹「違う！着替えてる時じゃない、普段の
生活の中で、『良い身体してるわね』『筋肉す
ごーい』で肩や胸を触る女性がたくさん居る
のよ」

杏奈「だから何？」

良樹「でもおじいちゃんは若い女の子の肌に
触れてはいけないですよね？」

杏奈「気持ちわる」

良樹「そこなんだよ、俺がおじいちゃんにな
って若い女の子の肌を触ってる感覚を、世の
中のおばちゃん達は味わってるなんてズル過
ぎるだろ！」

杏奈「……は？」

良樹「更衣室だって見放題じゃん、それもう

サブスクじゃん、んでもって俺は将来おばちゃんになりたい！こんな意味わかんない事言いたくないよ俺だって、小さい男だと思われるし、でも男女平等って、こっちからしたら全然平等じゃない！」

洗濯機の終了音がする。

良樹「どう今？垣間見えてる？いやがつつり見えてるでしょ？堂々と丸裸でスベってるでしょ？」

杏奈、無言で脱衣所に行く。

良樹、コーヒーを飲む。

杏奈、洗濯物を持って戻ってきて、そのまま干し始める。

杏奈「されて嫌なのか、嫌じゃないのかが大事なんじゃない？」

杏奈、良樹のTシャツにハンガーを、首の方からねじ込む。

杏奈「まずサブスクについてはツツコまない、ごめんね」

良樹「……それトレーニングウェアじゃない

から」

杏奈「私は女子更衣室におじいちゃんが居たら嫌です、そちらは男子更衣室におばちゃんが居たら嫌ですか？」

良樹「嫌ではないけど、その首のどこ伸ばさないで」

杏奈「おばちゃんよりおじいちゃんが掃除してる方が良いですか？」

良樹「それは……おばちゃんの方が……」

杏奈「このTシャツのサイズはこだわりがありますか？ピチピチ過ぎやしませんか？」

良樹「……動きやすくて」

杏奈「筋肉を強調してる、自らね、それで女性に筋肉を触られて嫌な気持ちになりますか？」

良樹「なりません」

杏奈「という事は、触りたくて触ってるのと、触られて嬉しいのとは、平等に入るのではないのでしょうか？」

良樹「そうですね」

杏奈「私はもちろん、身体を触られるのは嫌です」

良樹「それは僕も嫌です、あれ？平等？」

杏奈「私の身体に触れることは平等ではありません！」

良樹「はい！」

良樹、洗濯物を一緒に干す。

杏奈、Tシャツの中からハンガーを入れる。
れる。

杏奈「昨日のやつ良く乾いたね」

良樹「下に新聞紙を丸めて置いた」

杏奈「へー」

綺麗に並んでいる洗濯物。

杏奈「半身浴しよっと」

杏奈、浴室に向かう。

良樹「ついでにお風呂洗っと」

杏奈「(割って)え？聞こえない」

良樹「ついでに、……一緒に入ろうかな」

杏奈「全身欲になっちゃう、じゃ」

杏奈、出ていく。

良樹「ふー」

良樹、家賃更新のハガキを見つける。

良樹「来月かー、ん？」

○同・お風呂（朝）

杏奈、鼻歌を歌っている。

○同・リビング

良樹、テレビを見ている。

脱衣所からドライヤーの音が聞こえる。

窓の外が晴れたのを見て、ベランダに

洗濯物を移動させる良樹。

杏奈、やってきて、

杏奈「ふー、お腹すいたー」

良樹「……」

杏奈「あれ、晴れたんだ、洗濯物ありがと」

良樹「いいえ」

杏奈「……何？」

良樹「家賃更新って、前もって更新するかしないか決めないといけないのね」

杏奈「そりやそうでしょ」

良樹「え、今日までじゃん」

杏奈「そうね」

良樹「……どうすんの？」

杏奈「新しい家賃二千円アップしてるね」

良樹「込々で九万八千円」

杏奈「共益費が八千円だから実質九万」

良樹「実質は九万八千円の方でしょ？」

杏奈「ん？あはいはい」

良樹「で、どうすんの？」

杏奈「どうすんのって何？」

良樹「更新するのか更新しないのか」

杏奈「同棲解消するのかわからないのかでしょ？」

良樹「実質ね」

杏奈「二千円はアップしてるね」

良樹「そんぐらい俺が負担するよ、元々俺は

別れたくないし」

杏奈「別れたくないから負担するの？」

良樹「そういうことじゃなくて」

杏奈「……うん、今のはごめん」

良樹「杏奈はどう思ってたんの？」

杏奈、ソファ―に座る。

杏奈「それではここで問題です、主人公杏奈の気持ちとして妥当なものを以下の四つから選びなさい」

良樹「え？」

杏奈「1 更新する、2 更新しない、3 どちらでもない、4 それ以外」

良樹「何それ？」

杏奈「現代文のテストです」

良樹「知らないよ」

杏奈「ここまでの文章を読んで、話を聞いて、当てはまるものを選びなさい」

良樹「俺、杏奈じゃないし」

杏奈「そうだよね、分かる訳ないよね」

良樹「1 の更新する」

杏奈「…ブッブー」

良樹「2 の更新しない？」

杏奈「ブッブー」

良樹「どちらでもないとそれ以外は一緒だよ」

ね？」

杏奈「うん」

良樹「これ現代文のテストじゃなくて、マークシート寄りだよね？」

杏奈「正解は！」

良樹「はい」

杏奈「更新するじゃなくて」

良樹「え」

杏奈「更新したい！です」

良樹「え？お、やったー」

杏奈「私キャバクラで働く」

良樹「え？え、な、え？」

杏奈「なんだかんだで響いたの、朝の良樹の話」

良樹「楽しませるってこと？」

杏奈「そう、言われてみれば今まで考えたことなかった、この人と居たら楽しいとか、気使わないとか、そういうので人に会ってた」

良樹「あれはあくまでもお金を払ってるからって事ね、プライベートは良いんじゃないそ

れで」

杏奈「でも合コンで盛り上がらなかった時、男性陣のせいにしてた」

良樹「彼女の合コン話聞きたくないよ」

杏奈「私たちのきっかけも合コンじゃん」

良樹「……うん」

杏奈「だから私は、私を更新するの、夜の蝶になるの」

良樹「良く分かんないんだけど、え、決定？
キャバ嬢決定？」

杏奈「お客さんで働いてる人居て、体験とかもあるらしいし」

良樹「ちょっと待って、待ってね」

杏奈「うん」

良樹「えーと、良い例えが思いつかない」

杏奈「いいよ、例えなくて」

良樹「いやオブラートに包みたい、あ、さっきの現代文のテスト、現代文ってさ、得意な人は勉強しないって言うじゃん？」

杏奈「そうなの？」

良樹「答えが文章の中にあるから」

杏奈「あー」

良樹「文章をよく読めば答えが分かるから、文章をきちんと読めば、ね？良いんじゃないでしょうか」

杏奈「文章をよく読んでキャバクラになりました」

良樹「何でそうなるの？あー」

杏奈「良樹もホストクラブで働けばいいじゃん」

良樹「ホストクラブとキャバクラはハードルの高さが違うだろ」

杏奈「働こうと思った事あるんだ」

良樹「よぎった事は、……じゃなくて、えーと、学生時代に現代文のテスト大嫌いだったんだよね、だってさ、知らないじゃん？太郎だか幸子だかの気持ちなんて、んでこうだろうなって書いてたらバツされるんだよ？」

杏奈「間違ってたらね」

良樹「それがおかしいじゃん、先生だって太

郎じゃないんだからさ、何で太郎の気持ち分かるの？何をもって正解はこれだって言ってるの？何をもってキャバクラが正解だって言ってるの？」

杏奈「私の自由じゃん」

良樹「自由だけどそれが正解で合ってる？」

杏奈「だから私の自由じゃん！」

良樹「説明になってないし、はあーだからダメなんだよ、仕事だってそうだけどさ、お互いフリーランスでやってて」

杏奈「……」

良樹「雨の日にキャンセル入りやすいなら、雨の日割引だ、何かしらのサービスするだあるじゃん？ラーメン屋ですら味玉付けてくれたりするよ」

杏奈「……」

良樹「しかもブログとかも全然更新してないじゃん、SNSとかしっかり使っていないとき、うん」

杏奈「……何でそんなこと言われないといけ

ないの？」

良樹「ん？」

杏奈「仕事の事、言われたくなかったな」

良樹「あ、ごめんごめん、言い過ぎたね」

杏奈「良樹はSNSやってないよね？」

良樹「周りがやってるからね、あえてというか、その方が興味本位でレッスン受けにきてくれたり、そこからパーソナルトレーニングに繋がったりもあるから」

杏奈「うるさいなーもう」

良樹「聞いてきたから」

杏奈「仕事は？時間大丈夫？」

良樹「夜に変更したいってさっき連絡あったから大丈夫」

杏奈「まだ居んのかよ」

良樹「生理なの？今日」

杏奈「ちっ」

良樹「そんなイライラしたってしょうがないじゃん、ゆっくりしようよ」

と、杏奈に近づきボディタッチ。

杏奈「触らないで！」

良樹「……」

杏奈「気使えてる感出さないで、優しさをはき違えないで、女の子の事分かってるみたいに思わないでもし思ってたとしたら、やばいよ」

良樹「……え」

杏奈「遠回しに何度も何度も、面倒くさい」

雨が降ってくる。

杏奈、洗濯物を取り込む。

杏奈「午後も雨予報だったろうがよ」

良樹「あ、俺も」

と、取り込もうとするが、

杏奈「結局どうして欲しいの？」

風の音。

良樹「同棲して欲しいの？って当たり前じゃん」

杏奈、良樹に洗濯物を投げつける。

杏奈「キャバクラで働いて欲しくないならそう言えばいいじゃん！」

良樹「言ってるじゃん、そもそもそっちがやりたいて」

杏奈「(割って)ガタガタうるせえんだよひよっこが！おう？O型気取ったA型が、相手の気持ち分からねえ奴が男女平等について語ってんじゃねーよ！」

杏奈、さらに洗濯物を良樹に投げつける。

杏奈「お腹も空いたしホストの方がハードル高いも気になるし、何でこんなにイライラしなきゃいけないの？今日生理じゃないのに、あ、ちなみに生理の度に毎回イライラする訳じゃないからね」

杏奈、窓を閉め、ソファ―に座る。

少しの間。

良樹、洗濯物を掛ける。

杏奈、スマホをいじる。

良樹、腕立て伏せを始める。

杏奈、その姿に気付くが何も言わない。

良樹、腹筋を始める。

杏奈、無視してキッチンへ行き、パンを焼く。テレビを点け、立ったままパンを食べる。スクワットをしている良樹の上下運動を目で追うが、何も言わずに、テレビに視線を戻す。

良樹、自分の筋肉を触りながら、

良樹「ふっ！は！しゃーっす、ふー」

と、自分に酔いに行っている。

杏奈、ソファーに横になり布団を被る。

良樹「まだまだこれから」

と、お風呂に向かう。

お風呂のドアの閉まる音。

杏奈、布団から顔を覗かせる。

○同・お風呂

良樹、裸でお風呂掃除をしている。腕、背中、脚、全身を使って掃除している。

○同・キッチン

良樹、髪が濡れたままやってきて、プ

ロティンをシェイク。一気に飲み干す。

良樹「良し」

○同・リビング

布団にくるまってる杏奈。

仁王立ちの良樹。

良樹「鍛えてきた、心を」

杏奈、テレビを消す。

良樹「杏奈の自由だけど、キャバクラはやめて欲しい」

杏奈、布団から顔を出す。

良樹「俺のお隣にだけ失礼すればいい」

杏奈、じっとしている。

良樹「同伴アフターエブリデイ」

杏奈、じっとしている。

良樹「……延長に次ぐ延長」

杏奈、首を傾げる。

良樹「まだ？ えーと、もうあなたを永久指名」

杏奈「面白くない」

良樹「スベってる？」

杏奈「スベってはない」

良樹「良かった」

杏奈「髪の毛乾かしてあげる」

良樹「おう、さんきゅ」

杏奈、良樹の髪を乾かす。

杏奈「よくあんなにトレーニングするよね？」

良樹「昨日の自分に負けないうにがモットーです」

杏奈、ドライヤーを止める。

杏奈「頭皮硬くない？」

良樹「嘘？やばい？」

杏奈「んーぼちぼち、頭皮の色もあんまり良くないかも」

良樹「えーどうしょ」

杏奈「頭皮って筋肉じゃないから動かせないのよねー、マッサージだねまずは」

良樹「どうすればいいの？」

杏奈「こうやって指の腹で」

と、実践する杏奈。

良樹「おー気持ちいい」

杏奈「血流を良くして、髪に栄養が行き届くようにするの」

良樹「ほうほう、勉強になります」

杏奈、手のひら全体を使って頭皮を持ち上げる。

良樹「ふへえー」

杏奈「よし、おっけ」

良樹「ねえこれさ、SNSにあげたら？」

杏奈「え？」

良樹「頭皮とか髪型についてとか」

杏奈「そんなのたくさんやってる人居るよ」

良樹「長期でみたらさ、有りじゃね？」

杏奈「ずっと追ってくって事？」

良樹「切る前と切った後の髪型載せたり、色んなスタイルを載せてる人は居るけど、同じ人を1年間経過観察したのって、あんまりないんじゃない？」

杏奈「んー、まあそうね」

良樹「んでもって俺もSNSを始めようかなと思う」

杏奈「そうなの？」

良樹「肩こりひどいって言ってたじゃん？ 杏奈、姿勢とかシェイプアップも含めて、経過を載せていく、どう？ ものすごく良いアイディアかって言われるとそこまでだけど、一つ形にしておくのは、フリーの身としても名刺代わりになるし」

杏奈「うん、そうだね、やってみよっか」

良樹「じゃーこれから一緒に住むという事で」

杏奈「……つまんない、それ」

良樹「やったー」

○美容室

杏奈、カットしている。

客1「会社の髪色の規定があるんだけどね、男の子の新入社員が割と明るめにしてて、女子にもいるのよ、そんぐらいの子は。でもやつぱり上司にチクチク言われるんだって」

杏奈「規定自体が違う所もありますもんね」

客1「そうなのそれでね、うちの会社は一緒
なんだけど、結局その子黒髪にしたのよねー、
私的には好きだったんだけど」

杏奈「男女って不平等ですねー」

客1「不平等っていうか、不自由？な感じ？
男も女も」

杏奈「……不自由」

○フィットネスクラブ

良樹、お客さんにトレーニングを指導
する。

良樹「ラストお、はーいお疲れ様でした」

客2「あー疲れたあ」

良樹「めっちゃ良い感じじゃないですか」

客2「そう？」

良樹「はい、角度をつけてベンチプレスする
事によって、大胸筋の上部にアプローチでき
るので、その効果が見て分かります」

客2「いくつになっても、やっぱり男は大胸
筋だよね」

良樹「間違いないです」

客2「あ、また男はとか言っちゃった」

良樹「どうしたんですか？」

客2「いや、今厳しいからさ、『女だったら』とかはもう言わないけど、『男だったら』とかもダメみたいでさ、今」

良樹「そうなんですか？」

客2「それが響く奴も居るんだけど、人によるよね結局」

良樹「人による……難しいですね」

○良樹と杏奈の家・リビング（夜）

良樹、杏奈と晩酌している。

杏奈「管理会社から連絡きて良かったよね」

良樹「あーね、すっかり忘れてた」

杏奈「更新するって事に満足しちゃって、ハガキ出すの忘れるとか」

良樹「もう本当に存在すら忘れてた」

杏奈「ふふっ、ねえハイボール作ってー」

良樹「えー」

杏奈「ハイボールがカロリー低いって言ったの誰ですかー？」

良樹「僕でーす」

杏奈「じゃ作ってくださいーい」

良樹「分かりましたよー」

杏奈「やったー」

良樹、杏奈のグラスを取りに行くと、

チュー顔をする杏奈。

良樹「……」

良樹、グラスを持ってキッチンへ。

杏奈「ねえーえ、待ってよー」

良樹の声「聞こえませーん」

良樹、ハイボールを二人分作る。

杏奈「良樹さーん、若松良樹さーん」

良樹の声「聞こえませーん」

杏奈「もう」

と、キッチンへ向かう杏奈。

○同・キッチン(夜)

良樹、ウイスキーをグラスに注ぐ。

杏奈、やってきてバックハグ。

杏奈「聞こえてるくせにー」

良樹「あぶな、こぼれるって」

杏奈「私がやる、貸して」

良樹「さっき作ってーって」

杏奈「いいの私がやるの」

良樹「分かった分かった、じゃ炭酸持ってきて、一緒に作ろ」

杏奈「はーい」

○美容室・休憩室

杏奈、鈴木とお喋り。

鈴木「私も独立しようかなあ」

杏奈「良いんじゃない」

鈴木「かるっ」

杏奈「やるなら今のうちかもっと先かもね」

鈴木「そうなんですか」

杏奈「手当とかなないからね、産休育休とか」

鈴木「え！」

杏奈「……何？」

鈴木「先輩、だからカフェインレスコーヒーにしたんですか？」

杏奈「え？…あ、違う違う、そういう面では所属してた方がいいよねって」

鈴木「あやしい」

杏奈「私もここで社員だった時は、居心地良かったし、今もだけど」

鈴木「ふーん、マネージャーはいつでも戻ってきてって言ってましたよ」

杏奈「…言ってるだけだって」

○良樹と杏奈の家・リビング

良樹、杏奈に体幹トレーニングを教えている。

良樹「ラスト3秒」

杏奈「う、うつ」

良樹「3、2、1、2分の1」

杏奈「う、やばい」

良樹「はいオッケー」

杏奈「はぁー、地味にきつい」

良樹「骨盤の引き締めにもなるからこれ」

杏奈「じわじわ汗かいてきた」

良樹「たまには良いでしょ？」

杏奈「うん、良いね、疲れるけどやった感ある」

良樹「横隔膜と骨盤底筋群、それに腹直筋と脊柱起立筋でグッと箱を作るイメージかな」

杏奈「うんうん、分かんないけど」

良樹「姿勢も良くなってきたし、ちょっと写真撮らせて」

杏奈、正面を向く。

良樹「違う、横向き」

杏奈「うーん」

○フィットネスクラブ

良樹、お客さんを待っている。

持田、やってきて、

持田「おはようございます」

良樹「おはよう、なんかお客さんにプッシュしてくれたって」

持田「いや、女性のお客さんなんですけど、

ご自身で良樹さんが良いって言ってましたよ」

良樹「そうなの？」

持田「怖くないって言ってました」

良樹「何それ、までもありがとう」

持田「宜しくです」

○良樹と杏奈の家・外観（朝）

良樹、ゴミ出しをしている。

住人1「おはようございます」

良樹「おはようございます」

住人1「偉いわね、うちの旦那なんて一切してくれないわ」

良樹「僕も、たまにだけです」

○同・キッチン（朝）

良樹と杏奈、朝食を作っている。

杏奈「今日私コーヒーねー」

良樹「じゃ俺パンねー」

○同・リビング（朝）

良樹と杏奈、朝食を食べている。

良樹「あそうだ、杏奈の言う通り、筋肉が怖
いっていう女性のお客さん居たわ」

杏奈「でしょ？」

良樹「うん、ピチTやめる、ってか少し大き
いぐらいの方が動きやすいね、Tシャツ」

杏奈「今さら？そっちの方が似合ってるよ、
前髪も今みたいに上げといた方が絶対良い」

良樹「そう？ありがと」

杏奈「今日午後からでしょ？私のSNS用に
付き合ってね」

良樹「はい」

○同・寝室

良樹、座っている。

杏奈、頭頂部を撮影している。

良樹「どう？」

杏奈、写真を見せる。

良樹「まあまだ大丈夫っしょ？」

杏奈「まだね」

良樹「……」

杏奈「気にしすぎも良くないけど、現実逃避するの良くないね」

良樹「はい」

杏奈「専用のオイルつけてマッサージします」

良樹「お願いします」

杏奈、オイルをつける。

髪が湿ってボリウムが減ったように

見え、

良樹「ちょっと待って」

杏奈「え、何？」

良樹「やっぱやめよ」

杏奈「もう塗っちゃったよ」

良樹「いや頭皮が明るみに」

杏奈「当然でしょ、オイルつけてるんだから」

良樹「そうだけど」

杏奈「筋トレしすぎかもね」

良樹「え？」

杏奈「髪の毛って女性ホルモンだから、筋肉

って男性ホルモンでしょ？やりすぎももしかしたら、諸説あるけどね」

良樹「……筋肉バカにしないでよ」

杏奈「バカにしてないよ、その線も無くは無
いって話」

良樹「筋肉を動かすと血流も良くなるし、代謝も上がって基礎体温も上がるんだよ」

杏奈「うんうん」

良樹「それに達成感で、身体だけじゃなく心も成長できるっていうか」

杏奈「それ前にも聞いたし」

良樹「だから食事とかなんじゃない？作ってよたまには、栄養あるもの」

杏奈「作ってますよたまに！っていうかトレーニングしてるのに食事に気使わないってトレーナーとしてどうなの？」

良樹「プロテイン飲んでるし」

杏奈「それ以外にも野菜摂ったりとかあるじゃない？」

良樹「プロテインを」

杏奈「（割って）バカにしてない！現実逃避しないで現実の頭皮を見ろ！」

良樹N「結局の所、男女って不平等だと思う」

良樹、杏奈から頭皮マッサージを受けている。

○フィットネスクラブ

良樹、スタジオでグループレッスン、格闘技の動きを取り入れた激しい有酸素運動を、お客さんとしている。

良樹「しゃ！ワンツー、テンポ上げていきましよう！」

良樹N「平等平等って言うから、不自由に感じる時がある。お互いのできる事できない事、苦手な事得意な事、そういうのを分かり合って、歩み寄る事が大切なんじゃないかなと思う。だから俺は、いっそ男女なんて不平等だっと思う事にする。その方がなんか、近づける、というか、より相手の気持ちに、触れられる気がする」

○美容室

杏奈、カットしている。

客3「最初は良樹さんのブログを見てて、そこから髪型も意識するようになって」

杏奈「そうなんですね、ありがとうございます
す」

良樹N「1年間続けたSNS、少しは効果があったみたい。ただ、一人の人だけだと更新はしづらい、バランスを考えていかないと。
杏奈はフリーを辞めて、元々の職場に再就職した、将来子供ができた時の事を考えて」

○良樹と杏奈の家・リビング

良樹、ソファーでくつろいでいる。

良樹N「あーあ、杏奈と結婚できて良かった」

杏奈の声「私も！」

良樹「ん？」

杏奈、電話している。

杏奈「私も行きたい、うん分かった、はい」

良樹「どっか行くの？」

杏奈「うん、今から友達んちの子供見てくる。」

良い？」

良樹「もちろん」

杏奈「行ってくるね」

良樹「はい」

杏奈、着替えて出ていく。

玄関の閉まる音。

良樹N「たまには一人で映画でも観るか」

と、立ち上がる。

洗濯機の終了音がする。

良樹「俺回して……ま、やるか」

と、脱衣所に向かう。